

第35回少年の主張福島県大会

未来につなげるために

浮金中学校3年 村上 卓哉

僕の通う浮金中学校は、今年度を最後に小野中学校に統合され、閉校することになっています。以前から閉校の話は大人たちの間で話し合われていました。しかし、僕たち生徒は、こんなに早く閉校になるとは思っていませんでした。自分の母校が無くなってしまう。そう考えると寂しさもあり、統合には断固反対だと思っていました。

僕の学校は全校生徒13人。とても小さな学校です。でも、先輩・後輩の隔たりが無く、仲がいいのが自慢です。明るい雰囲気、みんなの心が温かい。居心地のいい場所。それが浮金中学校です。少人数ながらも、みんなで団結し、さまざまな行事に挑戦してきました。文化祭・体育祭。一人何役もこなしながら全校生で成功させてきました。いくつもの思い出が詰まったこの学校が無くなるのが未だに信じられません。

去年、地域の人たちが話し合い、統合が決断されました。地域の人たちも、決断するのはとても辛かったと思います。しかし、その時の僕は、皆さんの想いに気づくことはできませんでした。

僕は、自分の卒業と同時に閉校になることを聞き悔しかったです。どうして大人たちは閉校に反対しなかったのだらうと思いました。自分の卒業した中学校が無くなるのは平気なのか？僕は嫌だ。僕の祖父、父は浮金中学校の卒業生なのに…二人は、自分の母校が無くなることをどう思っていたのでしょうか。祖父は「浮金中が無くなるのは残念だ。今の中学校を作ったとき、自分はPTA会長で、音楽室を日本一にしようがんばったのに。」と残念がっていました。父は「学校が無くなるのは寂しい感じがしたけれど、これから入学する子供たちの未来が開けて良かった。」と言ったのです。僕はこの言葉の意味が最初はよくわかりませんでした。未来が開けるとはどういうことだらう。僕には理解できませんでした。

今年の4月。いよいよ最後の一年。「今年の文化祭は最後の文化祭だ。がんばろう。」と考えていた僕は、去年の文化祭準備を思い出しました。毎年、文化祭の準備は人手が足りず、苦勞しています。去年の文化祭も、全校生が一人何役もこなしながら、時間ぎりぎりのところで完成させていました。自分は今年で卒業だけれど、もし人数の少ないまま学校が存続していたら、後輩達はどうなるのか？

これからも、生徒数は減っていく、生徒一人一人の役割は増えていく。これでは、勉強や部活動もままならなくなってしまう。少ない人数のまま学校を存続させることは、後輩に大きな負担を強いことになるのではないかと思います。

また、大きな学校に統合すれば、選択の幅が広がるのではないかと僕は気づきました。現在、浮金中学校は人数の関係から、部活動は卓球部

しかありません。全校生が卓球部員です。しかし、統合されることで多くの部活動の中から自分に合った部、やりたい部を選ぶことができるようになります。自分で選択できる自由を味わうことができます。

「明るい未来が開ける」とはこういうことなのか。僕は父の言葉の意味がやっと解った気がしました。地域の人たちも同じ思いだったのです。自分の思い優先で母校を残すのではなく、未来につなぐための閉校という選択だったので

今、僕は閉校という事実を受け止めて、最後の一年間を心に残る年にしたいと考えています。生徒会の一員として、閉校に向けて何かできないか模索中です。今の自分は何をすべきか、何ができるか考えていきたいと思えます。悲しい気持ちではなく、明るい気持ちで学校の最後を見届けよう。僕は、伝統ある浮金中学校最後の卒業生としての誇りを忘れないでいたいと思っています。